

デュランティー『美男ギョーム事件』覚書

滝澤 壽

I. 前置きと梗概

フランス・リアリズムの闘将デュランティーの経歴や文学理論の概要、そして処女長編小説『アンリエット・ジェラルルの不幸』（1860）については、本『論集』第36号において、「デュランティーのリアリズムと『アンリエット・ジェラルルの不幸』」と題して既に論じた。本覚書は長編小説第二作『美男ギョーム事件』（1862）をめぐるものである。

巻末の記載によれば、1859年11月から61年12月まで二年余の歳月をかけて執筆されたこの小説は、第一作同様その舞台を地方の田舎に据えている。しかし処女作では明確には指定されていなかったその所在が、今作では冒頭で早くも確定されている。「フランス中央部、マングール・ヴェール」、オルレアン近郊である。先ず、紹介を兼ねて梗概を記しておく。

県庁所在地に居を構える良家の子息、25歳、小男で容貌ぱっとせぬ「男装した女」のようなルイ・ルフォルジュールは、自立と勉学のため、40キロほど離れたこの僻村に一軒の家を買い求め、隠棲する。身の回りの世話をするのは、見目麗しからぬ50代の百姓女ウーロニック。引越も早々に、見聞を広めまた漠としたアヴァンチュールの思いから辺りの散策に出かける。内気な性格が禍して、今までその種の出会いに恵まれなかったのだ。しかし今回はいきなり可愛い田舎娘レヴィーズ・イルグランに巡り合い、ウーロニックの手伝いをし、針仕事をする女中として雇い入れる。彼女は村外れのあばら屋に兄のヴォリュジアンと二人で暮らしていて、この兄がこの地方で恐れられている密猟者なのである。若い男女の間に恋が芽生えるのに時間はかからない。身分違いを盾に拒むレヴィーズもルイの熱意に押されて、彼の女となる。邪魔になったウーロニックをブドウ作りでアマチュア考古学者のカルドンシャに嫁がせて厄介払い、束の間の蜜月を愉しむ。しかし、問題は兄のヴォリュジアン、とりわけその仲間で凶悪な密猟者ギョーム・ブシャルである。「美男」と渾名されるギョームは雄牛のような男、喧嘩がもとで目下所払いの身であるが、レヴィーズを自分の「許婚」と考えている。村では次第に新婚気取りの二人の仲が噂となっていく。

そんな折、突如ギョームの帰村が伝えられる。「美男ギョームがやって来た」、「美男ギョームが帰ったよ」。この瞬間から「田園恋愛詩」風の物語は、惨劇の予感を孕んだドラマへと変貌し、「美男ギョーム事件」へと急速に展開していく。「自分の女」が町から来たよそ者に奪われ、面子丸潰れのこの密猟者は復讐を誓う。それはまたよそ者を白眼視する村人たちが密かに期待する裁きでもある。暴力の暗雲が漂い、恋人たちの仲も波立ち、精神は消耗する。追い詰められたルイは逆に挑戦的になり、教会のミサに敢然と恋人を連れて行き、村民に見せつける。そして居合わせた大男ギョームと逆上したこの小男がステッキで殴り合うに至る。この喧嘩沙汰を契機として、ルイはパリに出てレヴィーズと正式に結婚することを決意する。出発の前日、反感を抱く村の若者たちが二人を侮辱する歌を放吟、家に投石する騒

ぎを起こし、憲兵隊まで出動する事態となる。翌日の夜、事情により一日出立が延び、最後の準備に余念のない二人、他方ギョームはヴォリュジアンと庭の茂みで機会を窺っている。庭に面した部屋の窓を二つの人影が過ぎたまさにその瞬間、二発の銃声が鳴り響く。レヴィーズは即死、ルイは重傷を負うも一命を取り留め、裁判に証人として出廷する。ギョームは10年の徒刑場送りの刑を宣告される。翌朝ルイはドイツへの旅に出、4年後に帰国、名を変えてパリに落ち着き、考古学者として頭角を現す。しかし何故か若い女性に対する態度がどことなくぎこちない。「しかしパリではいずれ何事も知れ渡り、彼の若き日のアヴァンチュールも終には皆に知られることになる。けれども決して彼はそれを口にしなかったし、口にされることもなかった。」

II. 小説構成の問題

この小説の構成で一驚を喫するのは、梗概からも推測されるかもしれぬが、その提示部あるいはプロローグとも言うべき部分の異様な長さである。これより数年前に出版されたフローベールの『ボヴァリー夫人』も、未来の夫シャルルの中学校編入学から始まり、肝心のエマが登場するのにはしばしの間があるにせよ、クラシック・ガルニエ版でたかだか十数ページにすぎない。本小説の場合は、1920年刊行のシレーヌ版全340ページのおよそ半分、全13章の第7章に至ってようやく標題の男がその姿を現すのである。無論ギョームなる名前やレヴィーズとの関係などは、彼女自身やウーロニックによって物語の当初から語られるにしても、ジャン・ポーランの表現を借りれば (*Un primitif du roman: Duranty*)、その姿を見るには「未だ100ページも」待たなければならないのだ。デュランティーが自己の機関紙「レアリスム」で説く文学理論を厳密に適用すれば、確かにそうなるのかもしれないが、しかし諺にも言うように「過ぎたるは云々」である。

「筋を展開し始めることは、登場人物たちの性格が完璧に周知され、完璧に規定された時、初めて可能となる。」

バルザックの例を挙げるまでもなく、古典的な小説作法としては極めて正統的な原則である。けれどもその主張の割には、ルイの性格付けが今ひとつ希薄であり、とりわけその両親の人物造型があまりに漠としていて、親子の関係や田舎に一人隠棲する理由等がはっきり規定されていない嫌いがある。また姿を現さないのであるから当然ではあるが、ギョームの性格が伝聞のみにより構成されていくが故に、いたずらにその異形性が誇張され勝ちである。しかし半面に於いて、若い男女の牧歌風の恋愛がゆったりと描かれ、身分や環境のまったく異なる二人の間の恋愛心理が、作者の尊敬するスタンダール流に分析されているのである。

ほぼ長さの等しい二つの楽章からなる異例の構成の本小説は、恋の芽生えとその進展の諸相を緩やかに変奏する前半部と、ギョームの帰村からめまぐるしく事件が展開し、終局の悲劇へと一挙に急角度に上昇していく後半部が鮮やかな対照をなす、クレッシェンド形式を採用する。土壇場に登場する「機械の神」や遂にその姿を見せぬ『ゴドーを待ちながら』の標題人物とは異なり、ギョームは作者の周到な布石の後、よそ者に反感を抱く村人や今や遅しと待ち構える読者の前に登場するのである。この形式はまた、危機の直前に幕の上がるラシーヌ劇にその典型を見る古典劇とも異なり、時間に制約されない小説なるジャンルにより相応し

い形式と言えるだろう。それにしても、導入部のまだるさが破局で頂点に達する劇的緊迫に見合っているかどうか、判断の分かれるところであるが、やはりいささか過度で読者の飽きを誘うというのが本当のところであろう。

III. 対照法の小説

小説構成上の前半部と後半部の著しい対照もさることながら、人物造型上も対照法が多用されている。先ず恋敵の二人の男たちのうち、冒頭から紹介されるルイ・ルフォルジュールは次の如くだ。

「このよそ者は25歳、小男で、見たところ気難しそう、甘く才気煥発な容貌ではあるが、見た目がいいというよりはむしろ醜男であった。顎鬚がなければ、マンガの人たちは男装した女と思ったかもしれない。」(シレーヌ版 p.19。以下同様。)

「ルイ・ルフォルジュールはかなり奇妙な人間で、美点と欠点がたくさんあった。そしてその性格のどこかしら女性的なものは、神経の過敏さから来ているのであった。」(p.21)

「内向的な性行故にとっても神経質で、したがってまたとても個性的だった。」(p.22)

「〔……〕素朴で、交際嫌い、多くの点で子供っぽいこの若者、理屈の上では経験をつんでいるはずだが、孤独な習慣や若さ故の内面の煩悶によって高揚した個性の持ち主。」(p.25)

「『痩せっぽちの青瓢箪の小男で、町場の野郎さ。』」(p.214)

これに対して恋敵のギョームは、その渾名の通りがっしりした体躯の美男、無骨だが男の中の男である。

「美男ギョームはヴォリュジアンほどの上背はなかったが、見たところはさらに逞しかった。その並外れた肩、筋肉の塊の猪首を見れば、雄牛を連想するのだった。顎鬚も口髭も生やしていなかった。彼の皮膚は日焼けはしていたけれどもばら色と言ってよかった。そして素晴らしい大きな青い目は、その顔に率直な趣、開放的で心地よい趣を与え、それが美男なる渾名の由縁であった。しかしこの率直な趣は彼にあっては専ら本能の激しさを示すものであって、青い目の顔、豊富で生き生きした血でばら色に染まったブロンドの頭が通常そうであるようには、誠実さや善良さを全く示してはいなかった。」(pp.210-211)

「〔……〕彼女(レヴィーズ)は彼を粗野で意地悪だと思っていた。」(p.210)

ギョームが登場する第7章は「血とリンパ液の人たち」と題され、バルザック流の性格付けによるもう一つの対照が形作られている。即ち多血性体質は言うまでもなくギョームであり、彼に完全に隷属する相棒のヴォリュジアンはリンパ性体質とされる。森の中のギョームの小屋での二人のやり取りや居酒屋の場面、等々に見られる彼らの本能的な凶暴さの中にも、その役割は決まっていて、大男のヴォリュジアンの無気力な受動性とギョームの怒りっぽい攻撃性が対比され、人間の残酷な側面の追求は自然主義の先駆者らしい試みとなっている。

ルイ・ルフォルジュールが女性的な町のブルジョアであるのに対して、それに配されるレヴィーズ・イルグランは孤児で乞食同然の極貧の百姓女であるが、前作の女主人公アンリエット・ジェラル同様、あらゆる美質が付与されている。献身的で従順、無私無欲、勿論

愛する人にはこの上なく優しい。口には出さず不遇に耐える彼女だが、恋人を周囲の敵意や威嚇から守らねばならない事態に至ると、毅然としてこれに全力を尽くして立ち向かう。そうした運命の女との転居初日の出会いの場面は、第1章「曙」冒頭で次のように描かれている。

「村に着くと、ルイは若い百姓女に出会った。彼には大層可愛く見えた。道ですれ違った時、二人はお互いに見つめ合った。悦びのあまり恐らくルイの顔に、好意の表情が浮かんだのであろう。と言うのも、その娘の黒い、優しい目が注がれたのだった、それも遠くから、かなり長いことルフォルジュールの目に。

その女に話しかけたいという思いが男に湧き上がった。〔……〕

結局、ルイはその女に宿屋への道を尋ねた。彼女は少し顔を赤らめて教えた。」(p.27)
イルグラン兄妹を見かける場面。

「その連れの人(ヴォリュジアン)は一種の巨人、雄牛で、野生のそして恐ろしげと言ってもいい様相だった。ルイは、自分がひ弱く神経質なので、肉体の力を嫌悪していた。〔……〕百姓女(レヴィーズ)の優しい、優雅なそしてエレガントと言ってもいい様相は、百姓男の粗野な物腰と水と油のようだった。」(p.29)

ウーロニックからイルグラン兄妹の話聞き出す場面。

「優しい顔付きの、百姓女の中では類い稀にエレガントな、感じがよく開放的な、あの可愛い娘、ルイにあんなにも率直にまた素朴に好感を示した娘、その彼女がどうして評判の悪い、ほとんど見下されたような人間だったのだろうか。」(p.35)

レヴィーズが同じ屋根の下で暮らすようになってからの一場面。

「娘はエレガントな天性を備えていて、最初の教育の欠陥を別にすれば、エレガントな魂の持ち主とさえ言い得よう。」(p.182)

この天使のようなレヴィーズと対偶をなしているのが、前任の女中ウーロニックである。「有名な料理女」ではあるが、「好き勝手なことをし」、結局厄介払いされる形で、考古学の発掘に入れ揚げ、がらくたに囲まれて暮らす葡萄作りの変人カルドンシャと結婚するに至る年増である。この初老の夫婦が誠に滑稽な取り合わせをなしており、師シャンフルーリ譲りのカリカチュア精神が存分に発揮され、ルイ-レヴィーズの清純なカップル、そしてギョーム-ヴォリュジアンの魁偉=怪異なアウトロー二人組と鼎立するのだ。対照が単に二者の対立のみならず、三者による鼎立をも内包しているところに、本小説が対照の手法を多用しながら、単純な図式に還元されてしまわない所以があろう。またそのことは、善悪二極に単純化し勝ちなメロドラマ風大衆小説に堕さなかった重要な一因でもあっただろう。このようにデュランティーは前作同様対照法に基づきつつも、第三の対象、視点を導入することによって、物語のさらなる重層化を図っていると言えよう。

IV. ルイ-レヴィーズ恋愛心理分析

ルイとレヴィーズの恋は、梗概で一応規定したように確かに当代の「田園恋愛詩」風の物語ではある。既に見たその牧歌風の出会いにしても、また次に見るような恋のときめきや不安そして成就にしても、いわば紋切り型に近い。

「しかし一時間もすると、その娘の傍に行き、話しかけ、この家が気に入っているかどうか尋ねたいという打ち勝ちがたい欲望が募り、階下に降りてしまった。一瞬彼は心の葛藤を覚え、娘が仕事をしている小部屋の方へ自分が引きずられていく魅力の只中で、奇妙な気後れに捉えられるのを感じた。血は頬に上り、心臓は高鳴った。その部屋のドアの鍵に手を置いた時、心の動揺はいや増し、彼は一寸立ち止まった。もはや進むも退くも出来なかったのだ。自分の手が意志に関わりなく鍵を回してしまっていたことは疑いようもなかった。」(p.43)

「実際、もし本当に彼女が永久に彼のもとを去ってしまったのならば、一寸したいさかいくらいには打ち勝つ情熱を吹き込めなかったことに、屈辱を感じていた。」(p.110)

「二人にとってはすべてが輝きと魅力を増したように思われた。空はいっそう煌き、いっそう広大で、沈黙はいっそう厳粛だった。星々は祝勝の光を投げ、川は讃歌を唄いながら流れ、新鮮な草と森の香りはいっそう心身に染み入って来るのだった。そして二人の若者の胸には、魔法の気付薬のような甘美で強力な液体が靈妙に忍び入っていた。

『おお！レヴィーズ、僕のレヴィーズ、愛しい人！』、ルイは叫んだ。

『なあに、優しい人？』、彼女は答えた。

『なんにも』、彼は微笑みながら言った。

親しい二人称での語らいは、辛苦の果てに獲得した勝利のトロフィーであり、いかなる愛撫にも勝るものだった。

今やレヴィーズはルイの女、真に彼の女だった。〔……〕この親しい二人称での語らいは、二人を一つに結ぶ金の鎖だった。」(p.177)

けれども、問題は実際に結ばれてからである。二人の育った環境や社会的地位があまりにも違いすぎるのだ。レヴィーズは生来の性質は良くても、当時の農民階層の多くがそうであったように読み書きが出来ない女性である。

「彼女は読み方を習おうとし、半時間ほどやってみたが、意気阻喪して泣いてしまい、もう二度とその話はしなかった。」(p.230)

密猟者の復讐の影に怯え、神経が立って来ると、男の心には後悔の念さえ萌して来る。

「かなり苦々しい後悔の念で、彼は娘の条件の低劣さを考えるのだった。それはいわば彼自身もそれに結び付き、百姓たちがふと彼に向けたくなるすべての侮辱のレベルに彼を貶める低劣さであった。」(p.239)

そして自問するのである。

「お前はあの娘を誘惑した、今ではお前にべったりだ。一体どうするつもりだ。連れていくのか、結婚するのか、別れるのか。こうした決心のどれにも、エネルギーの要る努力が必要だ……」(p.204)

「どこに僕は落ち込んでしまったのか。〔……〕もしあの娘と結婚すれば、家族や係累との関係を永久に絶たねばならぬだろうし、丁重な事前の予告もせねばなるまい。〔……〕そしてもし結婚しないとすると、僕の良心はどこへ行ってしまうのか。僕は彼女を誘惑したのだ！すべてのことは、僕が望んだことだし、探し求め、喜んで我が身に引き寄せたことだ。〔……〕そしてさらに、レヴィーズと結婚すれば、哀れな娘は無知だから、どこに導き、一体どんな風に装わせたらいいのだろうか。」(pp.271-272)

周知のように、ルイはギョームの復讐を避けるため結局レヴィーズを連れてパリに出、正式に結婚することを決意するのだが、その前夜に惨劇が起こることになる。しかしこの決意は葛藤と逡巡の末のものであり、のどかで清純な牧歌的恋愛とは様相を異にする。時に彼は恋人を自分の運命を狂わす、不安と焦慮の元凶のごとく恨みがましい眼差しで見つめることもあるのだ。そして悲劇の後、傷も癒え、証人として出廷する日も近いルイの心境は、次のように表現されている。

「思い出は麻痺した彼の心の片隅に深く沈み込んでいた。それはあたかも肉体に残った弾丸のように、時に痛むが、毎日痛むわけではなかった。レヴィーズとの関係はルイにとって一瞬の陶酔と動揺を創出したが、根こぎにすることの出来ない習慣となった愛情ではなかった。その関係は短かった。〔……〕もはや彼女に二度と会うことはないが、彼女にとっても彼にとっても、もはや心配も不安もなかった。〔……〕彼は恋愛の幻想的で波乱に富んだあの世界にもはやいないことで、悲しくもまた幸せな一種の物憂さを感じていた。〔……〕彼ら（密猟者たち）に彼はある種の憐憫の情を感じていた。レヴィーズと彼のように、宿命の玩弄物だったのだ……〔……〕人生のこの部分すべてを、彼は封印したかった。危ないけれども破棄したくはない文書に封印するように。そして他の道へ、他の様相の地平線へ向かって行きたかった。そのように若さが望んでいる。そのように、より動的で、新奇なるものにより貪欲そしてよりしなやかな知性が、とりわけ望んでいるのだ。」
(pp.350-351)

多分に利己的なブルジョア・インテリ青年の恋愛心理を、スタンダールに学んだデュランティーは、このように鮮やかに解剖した。話そのものは、確認はされていない由であるが、『法廷新聞』にでもありそうな三面記事ではある。しかしその心理分析は、『ボヴァリー夫人』には遠く及ばぬとしても、それなりの深みを持っている。そして同時に、「町のブルジョア男に誘惑される百姓女」なるテーマに連なる重要な作品の一つであることも、銘記すべきだろう。ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』(1844)、アンリー・ミュルジュール『アドリーヌ・プロタ』(1853)、ウージェーヌ・ミュレル『ヴェロニック』(1860)そしてアンドレ・レオ『スキャンダル小説』(1862)、等々である。

V. 農民不在，土地不在の田園小説

本小説に農民は確かに登場するが、それはやはり個としてではなく、匿名のマスとして、そしてよそ者を排撃する陰険で頑なな集団としてである。ルイとレヴィーズの非を鳴らして家に押しかけ、騒動を起こす農民たちに、レヴィーズは敢然と立ち向かい反論する。

「来るがいい、百姓たち！受けて立ってやろう。みんな知っている。結婚前に『過ち』を犯さなかった娘はここには一人だっていやしない！それに盗み、隠された暗殺、奴らが毎日しているあらゆる卑劣な行為。その奴らがよくも私に石を投げるなんて……〔……〕誰がここに来る権利があるの。一人だってありはしない。〔……〕ここに子供を墮した女がいるよ。早く相続したいので親父を餓死させた男がいるよ。盗みを働き、無実の者を断罪させた男がいるよ……」(pp.325-328)

この騒動の場面を除けば、いわゆる根っからの農民は不在である。村長、司祭、宿屋の亭

主、憲兵、退役大尉、密猟者、居酒屋の常連客、あることないこと言い触らす姦しい女たちそして女中、それらが小説の舞台に登場する主な村人であり、耕作する農民や羊飼いは一切その姿を見せないのである。その匿名の農民がよそ者と女中の恋愛スキャンダル、この「みんなの侮辱」をギョームが罰することを期待するようになるのだ。つまり「美男ギョーム事件」は「村人全員の事件」となるのである。

「ギョームの復讐に抱く人々の期待は、みんなを元気づけ、活気づけていた。」(p.290)

そして法廷では、

「裁判長は陪審員たちに、『村内のみんなの憤激がどの程度まで被告に影響を与えたかを評価する配慮』をゆだねた。〔……〕陪審団はそれ（情状酌量）を二人に認めた。」(pp.355-358)

他方においてまた、この小説では農民の命とも言うべき土地とその所有についても一言も触れられていない。農民小説と言えばその双璧は、バルザック『農民』(第1部1844, 第2部1855)とゾラ『大地』(1887)であろう。『人間喜劇』『田園生活情景』の大作も『ルーゴン=マッカール叢書』第15巻目の大作も、いずれも熾烈な土地争いが主要なテーマとなっている。前者について作者バルザックは、「金持ちと貧乏人の間の次第に激しさを増す一騎打ちの争いから、どういことが持ち上がるだろうか。この小説は専らこうした恐るべき社会問題を解明するために書かれる。」とその意図を述べており、ゾラはまたボース平野の豊穡な大地に繰り広げられる、貪欲で狡猾な農民の血なまぐさい殺人にまで至る粗暴、破廉恥極まりない本能的営為を、どぎついまでの筆致で描ききっている。デュランティー自身にも、事業に失敗して所有地を手離さざるを得ないブルジョアとその献身的な娘を描いた中篇『ガブリエル・ガラルディー』(1876)はあるものの、しかし土地はあくまでもメインテーマではない。田園を舞台にしながらも、土地をめぐる「社会的闘争」は皆無であり、結局農民不在、土地不在の小説となっているのである。レアリスムの作家たちは真の田園小説の傑作を残さなかったとする見方が定説となっているが、ここでもそれを裏付けた形である。そしてその空隙を自然主義者たち、とりわけゾラが埋めていくことになるのだが、デュランティーもいささか微力ながらその先駆者の一人には数えられよう。

VI. 批評小史とまとめ

『アンリエット・ジェラルルの不幸』に続くデュランティーの長編第二作『美男ギョーム事件』は、1862年クレリュ書店からエツェル叢書の一冊として刊行された。それから10年後、1872年12月10日号の「ル・コルセール」に載せたゾラの記事によれば、デュランティーのこの小説はほとんど何の反響も惹き起こさなかったと言う。そしてそれは恐らく分析の無味乾燥さと筋の貧困さに原因があり、「『アンリエット・ジェラルルの不幸』より精彩がなく、掘り下げも不足」している、と論評されている。確かにバーナード・ウェンベルク著『フランス・リアリズム』によれば、刊行時に発表された批評はただ一つ、『両世界評論』(1862年9月15日号)誌上のウージェーヌ・ラティユの論だけ、しかもかなり手厳しい内容のものだった。新たな「世紀病」にも通ずるルイの性格造型や内面の葛藤そして恋愛心理分析等に一定の評価を与えはしたものの、文体や構成にはまさに仮借がなかった。

「デュランティーは自分の内外で見たすべてのことを、見たままの順序で、何も省かずに描いた。しかし文学の属性は観察する対象の間で選択すること、現実生活にあっては極めて稀にしか存在しない調和を構成することである。〔……〕デュランティーは言葉の価値を知らないようだ。〔……〕彼には繰り返すと冗漫さがある。〔……〕この作者は未だこれから言語学と文法のきちんとした勉強をしなければならない。」

このように断罪しながらも、ラティユは「1860年の世代」の心情や「何人かの若い作家たちの諸傾向」の証言としては重要な意義を認めていることも、同時に読み過ごしてはならない。そして、刺すごとき手痛い批判は批判としても、文学的信条としていわゆる文体なるものを蔑視していた著者もまた、この点においては莞爾と笑ったに違いない。「芸術における真摯さ」と「現代人の絵画」、彼が「リアリズム」紙等で年来金科玉条として来た文学上の二大原則が、認められているからである。

世紀が変わって1920年、デュランティーのファンと言ってもいい批評家のフェリックス・フェネオンは、筆者もその恩恵に浴しているシレーヌ版『美男ギョーム事件』を再版する。これに触発されてポール・スーデーは、『ル・タン』（1921年1月13日号）に書いている。

「フェリックス・フェネオン氏がデュランティーを発掘したのは間違いではなかった。『美男ギョーム事件』は完全に傑作と言うわけではないが、たくさん出て欲しいと思うような、とても良い小説である。」

1942年、『アンリエット・ジェラルルの不幸』の第3版がガリマールから出版されたのを機に、この第二作も同じく第3版がジャン・ヴォーダルの序文を付してコルベールより上梓される。その中でヴォーダルはデュランティーを次のように讃えた。

「この頑固一徹、無愛想な気難し屋は、しつこく主張することを嫌う繊細な人間である。〔……〕彼は率直に言ってわが国の大小説家の一人だ。ただ最も輝かしく、最も響き渡る作家の中ではなく、最も確かで、最も精妙な作家の中の大小説家なのだ。」

師ジャンフルーリ同様豊かな天分に恵まれていたとは言えないし、その人生は不運の連続ではあったが、唱導する芸術の新思潮リアリズム、当代を真摯に写し取る理論と実践の貫徹において、あるいは敢えて大小説家と呼んでもいいのかもしれない。『美男ギョーム事件』もまた、数々の欠点を内包しつつも、フランス・リアリズムの歩みをする一つの里程碑なのである。それにしても、彼が槍玉に上げ酷評したフローベールと『ボヴァリー夫人』がかくも現代性を帯び続け、新たな文学的地平を拓く読みを次々に生み出している豊穡さに比すれば、その凡庸さは覆い隠すべくもない。しかしリアリズムの時代とは、そもそも凡庸の時代であり、その凡庸さを誠実に写実する時代であったのだ。